

2019/04/17

宮本隆司 いまだ見えざるところ

MIYAMOTO Ryuji Invisible Land

2019年5月14日（火）－ 7月15日（月・祝）



〈ソテツ〉より 2013年 作家蔵

©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery
Photography / Film

展覧会概要

東京都写真美術館では、現在も国内外の美術展などで発表を続ける宮本隆司の個展を開催します。宮本隆司は、建築空間を題材にした都市の変容、崩壊の光景を独自の視点で撮影した〈建築の黙示録〉〈九龍城砦〉作品によって広く知られる存在となりました。近年は、両親の故郷である奄美群島・徳之島でアートプロジェクトを企画、運営するなど、その活動は新たな展開を見せています。

本展覧会では初期の作品から、アジアの辺境や都市を旅して撮影した写真や、徳之島で取り組んだ作品を展示します。確かにそこで見たはずなのに、どこまで見えているのかわからない、そんな、いまだ見えざる人とその場所について宮本隆司が展観いたします。

作家略歴

宮本隆司 MIYAMOTO Ryuji (1947-)

東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。建築雑誌の編集部を経て、1975年写真家として独立。86年、建築の解体現場を撮影した〈建築の黙示録〉、88年、香港の高層スラムを撮影した〈九龍城砦〉で高い評価を受ける。89年に第14回木村伊兵衛写真賞を受賞。96年、第6回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展に参加し、阪神淡路大震災によって破壊された建築物を撮影した写真を展示して金獅子賞を受賞。2004年、世田谷美術館で個展を開催ほか国内外のグループ展にも数多く出品している。05年、第55回芸術選奨文部科学大臣賞、12年 紫綬褒章受章。

出品予定作品

シリーズ〈建築の黙示録〉〈ロー・マンタン 1996〉〈東方の市〉〈塔と柱〉〈シマというところ〉〈ソテツ〉〈面縄ピンホール 2013〉など約100点出品予定

都市をめぐって

宮本は写真家としてデビューして以来、建築や建築が創りだす都市の風景を捉えた作品を数多く発表してきました。最初のパートでは、1970年代以降に撮影された都市を捉えたシリーズから、選りすぐられた作品を紹介します。

〈建築の黙示録〉



《サッポロビール恵比寿工場》1990年 作家蔵
©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery
Photography / Film

〈建築の黙示録〉は宮本にとっての代表作の一つであるシリーズです。最初に1988年に写真集『建築の黙示録』が出版されました。今回出品する作品は2003年に出版された写真集『新・建築の黙示録』に含まれる4点です。これは恵比寿ガーデンプレイスの前身であるサッポロビール恵比寿工場の解体作業の間に撮影されたものです。宮本は解体の始まる直前まで6年間、隣接するマンションに住んでいた縁もあり、1年かかった解体工事を長期間記録していました。

〈ロー・マントン 1996〉



〈ロー・マントン 1996〉より 1996年

1996年5月、宮本は詩人・佐々木幹郎の誘いを受け、7日かけてネパール・ムスタンの城砦都市ロー・マントンに赴きます。標高3,780mに位置し過酷な気象条件に晒された同地は、1991年まで外国人の入域が禁止され、電気・ガス・上下水道などの近代都市設備は無く、1996年当時交通手段は徒歩または馬に限られており、まさに秘境とも言うべき様相を呈していました。城内は王宮を中心に、チベット仏教寺院・僧院が建ち並び、住居がその隙間を埋める入り組んだ作りで、人々は城壁の外周で麦・蕎麦の栽培や羊の放牧を行い、衣食住を自給自足しています。9日間に亘る滞在の間、4×5の大判カメラを携え撮影は行なわれましたが、宮本は絶えず高山病に苛まれ撮影道中の記憶も定かでなく、再訪を誓ったものの機会を逸したまま20年以上の歳月が流れました。

〈東方の市 (とうほうのまち)〉



〈東方の市〉より 《Can Tho》 1992年

『文藝』に1991年～92年にかけて掲載されたシリーズ。1992年にギャラリー・ヴェリダの個展で展示されました。沖縄や徳之島といった日本の島を含む、アジア地域の街を捉えた作品で、〈建築の黙示録〉や〈九龍城砦〉と同期的に撮影されたものですが、1992年の個展以来展示される機会のなかった作品です。



〈塔と柱〉

キリコの塔の絵から想起され撮影したシリーズで、建設途中のスカイツリーをピン・ホールカメラで捉えた作品です。電信柱と電線を敢えて一緒に入れて撮ることによって、シュルレアリストであるキリコへのオマージュになると考えられたものです。

〈塔と柱〉より 2011年 作家蔵

©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

共同体としてのシマ

宮本は2014年に「徳之島アートプロジェクト 2014」を企画し、自身も作家として出品しました。宮本の両親は徳之島出身であり、幼少の一時期に生活していましたが、自身のルーツである徳之島について作品発表することはありませんでした。しかしプロジェクトを機に島へ通い続けることによって、島が共同体としてのシマの連なりであることに気づきました。奄美地方では「シマ」は島ではなく、集落ごとの小さな共同体を示す言葉です。シマに暮らす人々と場を宮本の眼を通して見つめます。



〈シマというところ〉より 《平土野》 2010年 作家蔵

©Ryuji Miyamoto

Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

〈シマというところ〉

徳之島の集落に暮らす住民たちのポートレートを紹介します。



〈シマというところ〉より

左) 《面縄》 2010年

右) 《金見》 2013年



《サトウキビ》 2018年 作家蔵
©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka
Ishii Gallery Photography / Film

〈ソテツ〉

2014年に開催された「徳之島アートプロジェクト 2014」のために撮影された写真。徳之島にはソテツの群生地があり、その新芽のクローズアップを撮ったものです。ソテツは南方の島の明るいイメージを持つ植物ですが、この地方にとっては、万が一の飢饉に備えて植えられている「救荒食品」として知られています。この島の風土や歴史を象徴する存在です。

〈ソテツ〉より 2013年 ©Ryuji Miyamoto
Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



〈ピンホール〉



《面縄ピンホール 2013》 2013年 作家蔵
©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii
Gallery Photography / Film

2歳過ぎまで面縄（おもなわ、徳之島の伊仙町）で暮らした宮本。その頃に見たはずの海辺に自作の大型ピンホールカメラを設置し、内部に作家自身が入り込んでの撮影した作品です。作家は、「ピンホールカメラの暗闇に身を横たえていると遠い昔の、わたしが乳幼児だったころの記憶が戻ってくるような気がした。微細なピンホールを通して入る微かな太陽の光を浴びていると、面縄シマの父の家の前にひろがるイリバアの波打ち際で海に浸かった遙かな記憶が蘇るように思えた」と語っています。

関連イベント

鼎談

登壇者 倉石信乃（明治大学教授）×林道郎（美術史・美術批評）×宮本隆司
日時 2019年5月25日（土）14:00～16:00

対談

登壇者 佐々木幹郎（詩人）×宮本隆司
日時 2019年6月22日（土）14:00～15:30

上記2つとも、東京都写真美術館1階ホール（整理番号順入場／自由席）、定員190名
※当日10時より1階受付にて整理券を配布します

宮本隆司ワークショップ「見るためには闇が必要だ」

ピンホールカメラを制作し撮影・現像を行うワークショップです

日時：2019年6月1日（土）10:00～18:00

対象：18歳以上

定員：20名 事前申込制

参加費：4000円 ※申込方法など詳細は当館ホームページでご確認ください

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

※事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

『宮本隆司 いまだ見えざるところ』

開催に合わせ、関連書籍（当展図録）を平凡社より発行予定です。

テキスト 倉石信乃（明治大学教授）／キャリア・クッシュマン（ウェルズリー大学美術館学芸員）／
藤村里美（東京都写真美術館）ほか

開催概要

展覧会名[和] 宮本隆司 いまだ見えざるところ

展覧会名[英] MIYAMOTO Ryuji: Invisible Land

主催 東京都 東京都写真美術館／朝日新聞社

特別協力 キヤノンマーケティングジャパン株式会社

会場 東京都写真美術館 2階展示室

東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は20:00まで）入館は閉館30分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし7月15日[月・祝]は開館）

観覧料 一般700（560）円／学生 600（480）円／中高生・65歳以上 500（400）円

※（ ）は20名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害手帳をお持ちの方とその介護者は無料、第3水曜日は65歳以上無料

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版を掲載の際は、必ず「作品キャプション、制作年、所蔵」および下記の表記をお願いします。

*特に所蔵表記のないものは東京都写真美術館蔵

*作家蔵には ©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film を明記

図版のトリミング、文字掛け等の加工はできません。

このリリースのお問い合わせ先

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 藤村里美 s.fujimura@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 press-info@topmuseum.jp